

いの流水俳壇

松尾 満津於選

「中追溪谷吟行句雑詠」

山と山はさみて仕切る冬の空

刈谷 志津

(評)作者の眼の位置に作品の焦点を定めた、一種の残映を心象として後にのこる句、自然観照の巧みが作品の表面にあらわれないだけに、対象をこころに刻む作者の姿が感じられる句である。「短日」の季節をこのように、おだやかな感じの取り方をする人、静かな落ちつきの中に、一見平淡にみえて深い年輪が刻まれている。

中天に吊橋崩る冬の谷

大川 節弥

(評)実景を見ると浮かぶ句、句を見て実景を思い描く作品と二通りある。誰がいつどこで見てもそれと同じ感じにとれるものとは限らないが作品の真実は厳として動かない。中天に架かる既設の橋、既に入は通れない、通らない吊橋の残影。

山里の廢屋悲し枇杷の花

森岡 照月

(評)山里の廢屋も淋しいが枇杷の花も淋しい花である。初冬の頃から枝頭に褐色の毛が密生した逞しい花軸を上げやがて白い花がかたまつてひらく、盛りが過ぎればやや黄色となる。この句は十二月の中追溪谷吟行会での作品であるが、觀光地として開発当時は多くの団体や個人の参集を得て活気を呈していたように思われるが、長くは続かなかつた、その顛末が枇杷の花に象徴された句のように思われる。

溪谷の深き青さに吸い込まる

筒井 正子

(評)誰もが何かを感じながらも、表現に口ごもる情景をズバリと言いつついる、溪谷に象徴された人々の生きざまがありありと見えてくる。対象を正面にして感情をたたみこんだ、この力感はあるとすがすがしい。流れるようなリズムに心をのせた句、おのずから、さらさらと流れる清流のひびきを聞くおもいがひとり住居の垣根を越えて、しのび寄る。

水澄むや平家の里の二段橋

片岡 包女

散紅葉眼下に遠く谷の音

友草 水月

秋天を一字に裁つ古吊橋

間 浩太

冬雲や溪谷までつづく九十九坂

竹崎 光子

新しきエプロン勤労感謝の日

津田 久美

冬天や峡の底より鶏の声

井上 郁子

風渡る川面に鴨の波紋あり 竹崎たかひろ

恙なき明日を迎う柚子湯かな 川村 博子

片隅の風に舞い飛ぶ枯れ落葉 筒井 一平

土つきのまま売られけり自然薯 野本 則昌

文机にもたれし心の隙間風 伊藤 萩甫

野仏の落葉はらいて体操へ 弘瀬うき子

言いたくて言い出せなくて秋しぐれ 松尾満津於

次 題 「当季雑詠」

締め切り 毎月第2月曜日

投句先

吾北教育事務所 上八川甲2010

☎ 867-2133

～ 大人のためのワークショップ②～



聞こえますか 子どもの心の声
～子どもの心と体を守るために～



日時 2月22日(火) 9:45~11:15

場所 ぐりぐらひろば

参加料 無料

講師 高知CAP代表 青木 美紀 先生

受付 2月1日(火)~18日(金)

申込・問い合わせ

ぐりぐらひろば ☎ 892-3151

※託児をご希望の方は事前にお申し出ください。